

かたみのクスノキ

植物系同窓会にのぞんで 植物系同窓会長 山口裕文

大阪府立大学は法人化して、様々な変化を遂げている。社会の要請に合わせ競争原理で国際化をはかり、世界に羽ばたくという。大学は、研究もさることながら、社会に貢献する人材を育成する場である。人材は、大学で完成するのではなく、大学での琢磨をもとにして社会人として大きく育って行く。大学に入学して、大学のなかで教養と専門知識を身につけ、人格形成の基盤をつくって卒業する。ひとりひとりの人生は、大学の4年間よりうんと長い。植物で例えると、種子から実生になり、苗木から若木になり、やがて樹になり、森や林をつくるようになる。社会で活躍するのにもっとも重要なのは柔軟な思考力と人格であり、成績や能力だけではない。

大学のキャンパスのたたずまいも人格に似ている。正門から入ってすぐのところに人格の形成過程をモチーフした石柱がある。この石柱は、何年経っても変化しない。命がないから変わりようがないのである。命という目でみると、おかしな石柱である。国道310号線に沿って正門と工学部門の間に緑地帯がある。これは、昭和39年から40年ころに工学部の学生によって植えられた檜の木達からなっている。当時は、細い若木が密に植えられていた。35年の歴史のなかで遷移がすすみ、電柱より高い高木は、森の林床に落ち葉をためている。

現在はB4棟と呼ぶ、農学部の建物から実験圃場と農場に進む途に、痛々しいすがたをした樹がある。クスノキである。私は、これを「かたみのクスノキ」と呼んでいる。すぐ、隣に建った特高変電施設のためにグリーンベルトが伐られたときに、危うく伐採されてしまうところを半身の枝払いだけで生き残った樹である。枝を切る前には、庭師さんは日本酒をふって樹の魂を鎮めていた。樹の魂は、ときに人に祟りを与えるからである。

もう忘れ去られようとしているが、この樹は由緒のある記念樹である。昭和40年頃に農学部が大仙学舎から引っ越した時に、大仙学舎の正面玄関に聳えていた樹を移植したものである。特高変電施設の工事の時にはこの樹が記念樹であった事は忘れ去られていた。命の無い奇妙な石であれば、伐られることはなかっただろうし、言い伝えや文書が残っておれば伐られなかったであろう。この樹は、大仙学舎から移された他の樹と一緒に無くなることを助かったのである。農学部で育った人たちの魂が助けたのかも知れない。クスノキは、日本在来の樹種である。少し攪乱のある林の尾根に育つ。材としての価値はほとんど無い。樟脳がとれるが、クスノキの変種ホウショウのようには収率は高くない。小鳥が種子を食べ散布するので西南日本であればどこにでも育つ。そんなふつうの樹でも、魂をもつ樹は各地で祀られている。

この伐採とちょうど同じ時、法人化で合併する女子大の記念樹が石のモチーフに近いグリーンベルトの一角に移植されていた。大学の緑やキャンパスのすがたは、そこで学んだ人たちに風景という形で様々な想いを刷り込む。農学部の記念樹は切られ、女子大の樹は記念樹として丁寧に移植された。アンバランスな話である。この時代の違う2つの植樹は、大学の歴史と将来の何を物語っているのだろうか？

大阪府立大学における最近の出来事は工学部門の近くに建ったサイエンス棟である。近代的で理工的なたたずまいのデザインである。建物の周りは植物で緑化されている。斑入りのアオキの前にシャガのパッチがあしらえてある。斬新な植栽のデザインと誉めたいところだが、とんでもない話である。これは植栽工事の3年の保障期間を過ぎると枯れてしまうはずである。アオキは日本在来の雌雄異株の植物でスギ林や照葉樹林の暗い林床に本来の住処がある。林床に生育するので暗い林で生活する送粉昆虫との共生をとおして雌雄異株の性質を維持している。シャガは湿った林縁の小川の縁に生育する日本の在来種である。アオキの雌木は厳冬の赤い実と濃い緑の葉を愉しむために日本庭園に使われる。日本のシャガは3倍体植物で種子を結ばず、地下茎で殖える。春先の白い花には趣があるが、年々動き過ぎるから庭園ではあまり好まれない。一般に、斑入り植物は、高緯度地帯にゆくほど無くなり、水と

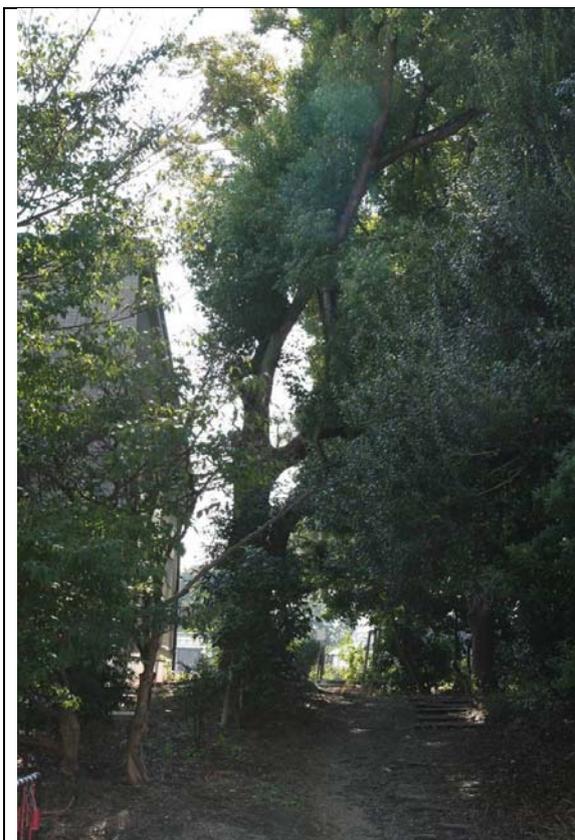
温度の豊富な熱帯に多くなる。園芸品種としての斑入り植物は日本でもっとも成熟したもので伝統的な園芸技術によって選び出されたものである。京都の庭園をみると、斑入りは古い寺社ではほとんど使われず、湯豆腐さんや料亭の庭に多い。斑入り植物は庶民の鑑賞する花といえよう。アオキもシャガも、本来湿った場所に育つから、乾燥する場にパッチで植栽されても迷惑な話である。施工した会社は枯れることは知っているはずである。

法人化してから大学の緑地帯の中に2つの建物が出来た。そのおかげで、時間をかけて出来上がったグリーンベルトの風景が変容した。中百舌鳥キャンパスの緑化計画はグリーンベルトを伐らない方針であったはずなのに。樹を伐るのは一瞬でも、樹を育て、森をつくるには長い年月を要する（堤 1970）。樹とともに育まれた人の思い出は、伐られれば樹の魂とともに消え去ってしまう。大学は、浅薄な人格をつくるのではなく、持続的で高潔な人格へ近づこうとする人材を創る場でなければならない。教養の府である大学であれば、理事も部局長も、樹や緑や自然に対する最少の見識は備えておくべきである。競争原理だけに基づく改革は短期的には効果はあっても樹を育てることは出来ない。競争原理は人格形成にどれだけ有効なのだろうか。農学部の歴史の持つ知恵と財産を活用できなかったここ数年の大学を「かたみのクスノキ」はかたっている。樹を育て、魂を育む素養の上に立って国際的に活躍できる先導的な人材を育成して、研究情報も発信できる大学に羽ばたいて欲しい。大学のキャンパスの緑は、いまを過ごす人たちだけのものではない。ここで育った、社会で活躍している卒業生たちの想いの森でもある。

文献： 堤久雄 1970. 学園の緑と本学のあり方と 大阪府立大学大学だより 第5号

平成 21 年 10 月 17 日

大阪府立大学名誉教授



B 4 棟前の「かたみのクスノキ」



理系新棟の前に植栽された斑入りのアオキとシャガ